

<b>Title</b>	マスメディアにおけるスポーツ観の構成と偏向
<b>Author(s)</b>	梅津, 迪子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 24(2), 2012. 3 : 135-150
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3664">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3664</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

## マスメディアにおけるスポーツ観の構成と偏向

梅 津 迪 子

Construction and Deflection of Perspective on Sports in Mass Media

Michiko UMETSU

Conducting a discourse analysis of interviews with athletes from the standpoint of gender bias, this article attempts to examine values and meanings which are constructed between information senders and recipients (the audience). A 72-minute recorded questionnaire given to the team members and manager of the Japan women's national soccer team (in Nadeshiko Japan), the champions of the 2011 World Cup, was analyzed. It is suggested that the mass media has no small effect on promoting and reinforcing perspectives on sports based on traditional sex-role stereotypes.

---

**Key words;** メディアスポーツ, なでしこジャパン, インタビュー, 女性観, ジェンダー  
**Key words;** media sports, Nadeshiko Japan, interview, perspective on women, gender

### 1. はじめに

「なでしこ」は属の学名をギリシャ語で「Dianthus」といい、DIOS (神) + ANTHOS (花) を語源とする「神より与えられた神聖な花」の意である<sup>(1)</sup>。サッカー女子日本代表チームの愛称“なでしこジャパン”は、アテネ五輪を目前に控えた2004年、日本サッカー協会の女子職員のアイデアで一般市民に公募し、2万7000通の応募の中から選定されたものである。その名を全世界に轟かせたのは、2011年ワールドカップ優勝をはじめ、アジア大会優勝、ロンドンオリンピック出場権獲得など、近年の大いなる躍進である。

そこでまず、今日に至るまでの日本女子サッカーの歴史を概観しておくことにしたい。

表1に示すように、女子サッカーは実業団（企業内女子サッカー部）のクラブが多く、企業内で働きながらプレーをしている。常に企業経済（経営母体も変更）の状況に応じて、自分たちの運命も左右され、生活とスポーツを選択する結果に追い込まれている。たとえば、澤も同じようにバブ

表1 日本女子サッカーの歴史

1981年	日本女子代表結成（日本サッカー協会の男子はトレセン制度をスタート）
1989年	日本女子サッカーリーグ（JLSL）スタート
1991年	第1回女子選手権（現W杯）に出場するがグループリーグで敗退
1993年	男子サッカー界、国内プロリーグ、Jリーグが発足しサッカーブーム
1994年	日本女子サッカーのトップリーグは、Lリーグと改称してスタートし、多くの企業がバックアップ（企業内クラブ）した 代表強化費も増額
1995年	第2回世界女子選手権スウェーデン大会
1996年	女子サッカーがオリンピックで正式種目と認められ、アトランタ大会（95年の世界選手権はアトランタの出場権を争う大会でベスト8位まで）に28年ぶりに出場するも敗退（サッカー協会の男子はさらにユース年代の強化指導指針を発表）
1996年	日本サッカー協会の渡辺弥生氏（日本サッカー協会1級審判員）、当時世界に60人しかいない国際審判（主審）に日本人女性として初めて選出される
1998年	スポンサー撤退、フジタ天台サッカークラブ、日興証券ドリームレディース、Jリーグ横浜ブリュージュ消滅、その他複数のクラブが廃部
1999年	鈴与清水FCラブリーレディーズ、プリマハムFCくの一 <sup>いち</sup> 廃部 第3回世界女子選手権アメリカ大会でベスト8に進出しなければシドニー大会には出場できない 澤はベレーザとの契約が打ち切りとなる
2000年	オリンピックシドニー大会出場不可となる
2002年	（Jリーグ男子は日本型育成システムの確立を目指し、Jリーグアカデミーをスタートさせている）
2003年	女子世界選手権の名称が2003年大会から「女子ワールドカップ」と改称になる 日本はその大会出場のためのアジア予選、第14回アジア女子選手権の3位決定戦で韓国に敗れたが、残り1席をかけた戦いでW杯へ切符を手にする
2007年	女子の出場はなし

ル経済がはじけて日本経済が下降していく94年に、ベレーザCFは西友のバックアップを受けて「読売西友ベレーザ」と名称変更してLリーグに参戦している。その後、西友が撤退し98年には「読売ベレーザ」に、99年には「NTベレーザ」にと経営母体の変更とともにチームの名称が変わり、経営状況に翻弄されながら契約見直しにも迫られている。プロでさえこのような状態で、プロ契約以外の選手たちはバイトをしながらプレーをしているのが実態である。同じ時期、男子Jリーグにも危機は訪れているが、98年に横浜ブリュージュが合併するという形で消滅しただけで、女

子のチームはほとんど消滅した。このことは、男子が地域密着という理念を掲げてスタートしたのに対し、女子は企業からの資金援助によってスタートしていることによる<sup>(2)</sup>。今日では、各Jリーグのクラブ参加条件の中に「女子チームの保有」が謳われているが、他の女子スポーツ種目が同じとは限らない。

ここで海外に視点を転じると、女子サッカーを取り巻く厳しい状況が至るところに散見される。

たとえば、ロンドンオリンピックのアジア地区予選2次リーグでは、イラン対ヨルダン戦の直前、イラン（女子チームは2005年結成）に出場停止の裁定が下された。その理由は、選手が着用するユニフォームのデザインが帽子から足まで全身を覆い隠すものであり、FIFAの規則に抵触する（試合中、接触したとき首が絞めつけられる危険がある）とのことであった。

イランでは、32年前のイスラム改革を機に女性の社会改革が進む一方で、「女性は人前で髪を覆い隠すこと」が国の方針や法律に基づいて義務付けられている。イラン女子サッカー協会のショジャエイ会長は、「私たちは国の規則でこのユニフォームを着なければならぬ。これは柔らかな生地で作っているので、試合中に相手選手に引っ張られたり、激しく動いたりしても危険ではない」と主張している。

当然ながら、実際にピッチに立つ選手たちにしても、今回の裁定には納得がいかない。キャプテンのニルファー・アルダラン選手は、元代表選手（GK）の父親のもとで幼少時からサッカーに親しみ、現在はパートナーもサッカー選手、また一児の母親でもある。曰く、「選手は働きながら、あるいは学校に通いながら一生懸命練習してきたのに、プレーの機会が得られず悔しい。私たちはイスラム教国の女性として、自分たちがサッカーをしている姿をFIFAや世界の関係者たちに観てもらう権利がある」と。

こうした折、なでしこジャパンの優勝は彼女たちに大きな勇気を与える契機となった。「日本が優勝したことを誇りに思う。イランも日本と同じアジアチームだから、私たちもいつかワールドカップに出場したい」と語っている<sup>(3)</sup>。

また、アメリカ、ニュージャージー州のスカイブルーFCに所属するケンダル・フレッチャー選手（前回アメリカ代表に選出）は、4歳からサッカーを始め、大学でもプレーを続けていたが、19歳の時、アメリカ女子チームがワールドカップで優勝したことが大きな転機となった。「あの当時の代表選手が私のヒロインだった。彼女たちが人生のお手本、とても大きな影響を受けました。今度は、私が子どもたちのお手本になる番」という。そして、大学卒業後もスカイブルーFCでプレーを続ける決心をした。

ところが、そのスカイブルーFCは19勝し、2000年にクラブとしてスタートするが、わずか3シーズンで経営が破綻した。2009年に堅実な経営をめざして再開し、現在は海外から選手が移籍するまでになっている。監督はオリンピック代表のジム・ガバーラ。

しかし、クラブハウスや練習場などの専用施設はなく（賃貸）、また選手の年俵は日本円で約200

万円カットに留まる。それでも毎日の練習は欠かさず、さらにチームの運営資金を得るためFC付属組織の女子ジュニアクラス(100名募集, 4日間のレッスン+ゲーム観戦チケットで1万円)を開催するとともに、FCの知名度アップと試合の観客動員数増大を期してサイン入りポスターを配布するなどの情宣活動を行っている。

このように、お世辞にも安泰とは言えない状況ながらも、彼女は「このチームでプレーできてとても満足している。そして、大好きなサッカーができることに感謝している」という。また、「お金のためだけにプレーしているわけじゃないけれど、選手がサッカーで暮らしていけるようにこのリーグを成長させたい」と語っている<sup>(4)</sup>。

このように、女子FIFAランク第1位のアメリカにおいても、かつての“なでしこ”と同様の女性の位置が窺われるのである。

メディアから繰り返し流される“なでしこジャパン”優勝の映像は、ケンダル・フレッチャーのケースと同様に何人ものヒロインを生み出すとともに、人の生き方に夢と希望とチャンスを与える大きな契機となった。また、3月の東日本震災被害や福島原発で転地を余儀なくされた人々、一向に進まぬ復興に疲れ果てた人々や、先の見えない暮らしに沈みがちであった日本中の人々に「最後まであきらめない」メッセージを届けたのもメディアである。

しかし、振り返ってみると、“なでしこジャパン”が6月21日にドイツに向けて発つときには、選手と家族や関係者だけの映像がわずかに放映されるばかりであったにもかかわらず、W杯優勝後の凱旋帰国に際しては、空港に詰めかけた多数の報道陣と一般市民の様子がテレビでLIVE中継された。“なでしこ”チームは空港で記者会見を終えた後、W杯の放送権をもつNHKとフジテレビに生出演し、1時間のインタビューを受けている。

ここで、「勝てば官軍」の世間の露骨さを批判することは容易だが、こうして毎度繰り返される一過性のイベントやタレント扱いの問題は、人間学的な視点に照らしてみれば、スポーツを巡る主体性や自律性といった根源的な検討を要するテーマであることは多言を要すまい。少なくとも、「アスリートたちの戦跡」をファイルに綴じて完結するような表層的な議論に終始してはならない。

## 2. メディアにおける女性スポーツ

### 1. メディアスポーツとオリンピック

スポーツは文化としてさまざまな形で人々の暮らしの中に「みる」スポーツ、「する」スポーツ、「応援する」スポーツとして密接にかかわっている。そして、スポーツもメディアと深くかかわりながら、なくてはならない存在になっている。1960年代にテレビ受信機が投入されて以降、ラジオ・新聞を中心としたジャーナリズムの内容が徐々に変化し、人々のライフスタイルも変わっていった。21世紀になってテクノロジーの進化は留まることを知らず、テレビが伝えようとしていた「社会の

今=現在」でさえも、多チャンネル増加とともに競争が始まり、切り取り、繰り返し、録画・編集などを通して「送り手」の意図が伝わりにくくなってきた。受け手の視聴率に一喜一憂し、どの局も類似した内容に終始するあまり、独自性を失いつつある。「送り手」から視聴者の「受け手」、「受け手」から「送り手」へとネットコミュニケーション、FAXでの参加など、メディア・テレビの視聴の在り方も他のメディアとは一線を画したものに变质している。

スポーツはメディアを介して観客を含む社会的できごとそのものとして生み出される<sup>(5)</sup>。2003年は世界陸上をはじめ世界水泳、柔道、バレーボール、W杯が開催されたが、衛星放送・地上波で報道されたのは大部分（9割方）が男性スポーツであり、女性スポーツはテニスとゴルフを合わせてわずか7%に止まった<sup>(6)</sup>。女性がクローズアップされることがその時代の女性の社会的な地位を反映していることを顧慮すると、スポーツ報道における上記の極端なアンバランスは、圧倒的な男性優位の現状を露呈しているのではないか。

また、平井は日本人のスポーツ全体に対する感覚、とくにオリンピックに対する錯覚があるのではないかと述べている。日本で当たり前のことが他の社会でも当たり前のことに違いないという錯覚について、オリンピックがアマチュアスポーツの最高峰であり、国家的慶事であると信じ込んでいるという。サッカー協会も同様であるとする。その錯覚、あるいは感覚的なズレが日本人のスポーツ観、スポーツ政策、行政に及ぼす影響が大だとする<sup>(7)</sup>。つまり、アメリカなどではオリンピックよりも野球、バスケット、アメリカンフットボール、テニス、ゴルフなどのスポーツが年中各地で催され、会場に足を運んでいる。当然、その背後にはスポーツの放映権をはじめ、選手獲得に巨額な大金が動いている。我が国のオリンピックの歴史を遡れば、JOCが政治的判断に迎合してきた経緯もあり、アマチュアスポーツという定義も解釈も曖昧な今日に至っている。

しかし、市民の多くはナショナルアイデンティティにかかわる特別なイベントとして捉える傾向があるのも事実であろう。今日ではオリンピックはメディアを通して、放映権や広告収入をめぐって巨額な投資がされる完全なメディアビジネスとなっている。

また、オリンピックへの出場権を競う大会においても、アスリートを芸能タレント同様に扱う傾向があり、試合会場は人気グループを招き、コンサート会場のように応援を繰り返している<sup>(8)</sup>。このような状況がエスカレートすると、アスリート自身もタレント感覚に陥りやすい。スポーツ選手自身は何を受け手に発信したいのか、つまり、メディアスポーツは「誰が」「何のために」「どのように」「何を（ある事象）」「どう表現したいのか」について、フジテレビに生出演した“なでしこジャパン”のインタビューを手がかりに考察を加えていきたい。

### 3. インタビューの分析

#### 1. 分析方法

メディアスポーツの研究、とくにジェンダー視点からは女性が新聞・テレビに掲載された言語表現や写真映像の出現頻度をカウントする方法の分析、スポーツ実況における会話分析、解説者との関係での談話分析研究は<sup>(9)(10)(11)</sup> 多々見受けられるが、送り手側からの視座はもたれてこなかった。とくに、スポーツ選手に向けた長時間のインタビュー（トーク）分析はあまり研究されていない。

“なでしこジャパン”が勝ち進むにともない、メディア側も送り手→メッセージ→受け手といった二項対立的で固定的にとらえられていくのに限界が生じ、一方向からだけでなく視聴者への参加、ツイッターという書き込み、強化選手自身の海外からのブログ、各民放テレビ局から視聴者への応援メッセージ受付などによって、送り手と受け手の境界が曖昧になり、メディアスポーツの在り方が変容（変質）してきている。

そこで、“なでしこジャパン”が帰国直後にフジテレビ局（大会放送権有）で生出演（1時間）した時のインタビューを録画し、その質問項目からメディアスポーツの背景と問題点を考えてみたい。

一般にスポーツの実況インタビューは特殊な状況下で行われることが多く、クロノロの手法を用いることが多い。インタビュー（取材）も活字と電波メディアとの間には狙いに違いがあるが、近年ではいずれも各種目担当による継続的な取材者が多く、事前に各自が蓄積した資料を備えている。しかし、基本となるのは誰のための質問かといえば、明らかに視聴者であろう。何を知りたがっているのかを推測してプレゼンテーションする。山本によるとスポーツインタビューのテクニックとして10のヒントを挙げている<sup>(12)</sup>。①聞かれる側は、何を想定しているのか。②答えが話の接ぎ穂を含んでいる。③質問の中に答えを織り交ぜない。④答えや返事や相づちをむやみに消さない。⑤脳のハードデスクを全部検証しないと答えられないような質問は避ける。⑥外国語で答えが出るような質問は、単純に。⑦温度を考えて聞く⑧先のことを聞くときは、相手の胸の内を察してから。⑨結果を短期的に判断しない。⑩質問を自分に向けてみて、無理がないか判断する方法論を述べている。しかし、視聴者層も分からない不特定多数の視聴者や視聴率も考慮しながら、その設問に送り手自身がインタビューを通して、「何を構築したいのか」という視点を入れることはタブーなのであろうか。ある程度、放映される時間帯に即して視聴者を推測することは可能であろう。そこで以下、

- ①番組制作で意図する技術・編集、プロデューサーやアナウンサーたちが依拠している価値などは、どのようにテキストに反映されているのか？
- ②そのテキストは、私たちが日常生活の中で経験するメディアスポーツをどのように粹づけているのか？

といった視点から<sup>(13)</sup>、インタビューのやりとりを確認していきたい。

表2 インタビューの様相

フジテレビ「FNN スーパーニュース」(2011年9月12日16:53～18:05)より

〈状況〉

安藤優子アナウンサーが主に質問を行う。視聴者からのFAXメッセージ受付。木村太郎、奥寺健、大島由香里、椿原慶子アナウンサー、永島昭浩スポーツキャスター。

“なでしこジャパン”澤穂希、近賀ゆかり、海堀あゆみ、鮫島彩、熊谷紗希、宮間あや、川澄奈穂美、安藤梢、丸山桂里奈、大野忍、田中明日香、佐々木則夫監督がインタビューを受ける。

優勝のクス玉割りを佐々木監督と澤が行い、花束を贈呈された後、スタジオにトロフィが届き、重さについて感想を聞く。

〈対話記録〉

・安藤アナ：トロフィ、どう思いましたか。みんな持ちましたか？

・安藤アナ：(PK戦のハイライトシーンを流しながら、海堀に)この足なんですけど……。まず、素人的な質問なんですけど、これはキックをする前にこっち(左)に跳ぼうと思って動いていたんですか？先に読んでいたんですか？それとも読んでいた？左に行ってみよう？動いているもの(ボール)を先に読んでいたんですか？それともイチかバチか？

→海堀：左に行ってみようと言うのではなくいろんな動きを見ていて、こっちに跳ぼうと思っていました。思いっきり跳んだらボールが内側であって、手じゃ駄目だなと思って足で蹴りました。

・安藤アナ：(同じように同点になった澤のゴールへのキックシーンを見ながら)私たちはカメラの位置が裏側から撮っていたので、どうなったのか？気が付いたら澤さんが倒れていた姿しか分からなかったのですが、どこで(ボールの)蹴って(足の部分)いるんですか？

→澤：右足のアウトサイドで蹴りました(実際にスローで2回実施する)。これは、その前にキーパーが倒れていて時間の余裕があったので、宮間がnear(ゴール近い位置のこと)に合わせる、坂口と澤が宮に合わせるって言ってきたので……。先に読んでいた。ボールが行き過ぎたので、とっさに足が出ました。

→佐々木：あれも(右足アウトサイドキック)北京での第1戦、ニュージーランド戦もああいう形で入れているんですよ(このキックは今回だけでなく、何回も入れていることを言っている)

・安藤アナ：(PK戦の映像を流しながら海堀選手が足でボールを弾いたシーンに対して)この足なんですけど、キックをする前に体が動いていた？先に読んでいたんですね。

→海堀：体が先に動いていたので、足しかないと思ってとっさに足が動いていました。

・安藤アナ：(熊谷選手に) 涙が溜まっていたように見えたんですが……。PK戦では(順番が) 4番目でしたね。あそこまで体力を使い果たしてきた時点で、狙っていたんですか？(と質問しつつ、佐々木監督に) 4番目に熊谷選手をもってきたのは、狙っていたからですか？ 熊谷選手は若干20歳ですよ。

→佐々木：(笑いながら冗談のように) 狙っていました。熊谷は「わたし？ 4番ですか」って言ったんですよ。熊谷を4番目にしたのは単に背番号が4番だからです(笑い)。本人もビックリしてました。PK前の円陣を組んでいる時、澤は「私、蹴らなくていいでしょう？」と言うので、私はみんなに「澤は許してやれ。さっきゴールに入れたから」と言いました。

・安藤アナ：(熊谷選手に向かって) プレッシャーはどうでしたか？ 蹴る前にスタンドを見ただけでしょう？

→熊谷：(海堀が) その前に3本止めてくれて、チームは余裕があって、考え過ぎると外しちゃうと思ったんで、考えないようにしました。キーパーがプレッシャーをかけてきて、なかなかラインに下がらなかったんで、プレッシャーを外そうとして、呼吸をしようとしてスタンドを見て、呼吸したんです。

・安藤アナ：スタンドのサポーターを見たら、よけいと緊張すると思うんですが、なお、プレッシャーがかかるじゃないですか？

→熊谷：あのキーパーを見たらヤラレルと思ったので……

・安藤アナ：(スタジオに置かれたワンバック選手の等身大写真模型を見ながら) ワンバック選手はたしか181cmぐらいですよ。脅威は感じないんですか？ 体格の大きな選手と戦うことについては？ こういうデカイ人たちを相手に、身長差も幅も違うのに……何でカバーするんですか？ 身長差は7cmですよ。

→澤と川澄：確かに身長差も幅も、ストライド、スピードも違いますが、なでしこジャパンはパスワークとポジション、海外の選手より質が高いですよ。やる時に、普通にぶつけて行くとかなわないところがあるので、相手に知らせないようにしながらぶっかっていきます。試合中は関係なしに……からだをぶつけていきます。

・安藤アナ：からだをぶつけていく？ 女だと嫌じゃありません？

→川澄：体格差があるなりに……感じる時に相手にぶっかっていきます。

・安藤アナ：(木村アナに対して) 女子の頭脳プレイはどう思いますか？

→木村アナ：この3日間、安藤さんに「日本の女性はすごいですよ。日本の男性はダメ」と言われ続けていました。

・安藤アナ：スタミナの持続力は？ スタミナの素は？ 丸山選手。

→丸山：わたし、あまりスタミナ無いほうなんで……

・安藤アナ：じゃ、坂口選手は？

→坂口：女なんで、根性はあるから……気力で走ると思います。

・安藤アナ：女の人は強いですね。心が折れそうな時はありますか？

→安藤梢：ドイツ戦では心が折れそうになりましたが、延長戦もあり、ピッチ内でもピッチ外でも声が聞こえてきて最後まで頑張りました。

・安藤アナ：スタミナ的にも強くて、このような乙女たちを束ねられている佐々木監督に、女子チームをまとめるのにご苦労もおありと思いますので……女子チームの素顔について〇×方式で札を出してください。

〈以下、〇×方式質問〉

・安藤アナ：チームで一番おしゃれなのは川澄選手？ おしゃれ番長は川澄さん？ 思い切りがよい性格、その爪・ネイルアートは川澄さん？ その爪のポイントは？

→川澄：背番号、勝ち星、日本、名前（希）、サッカーが好き、ジャパンプルーをベースに、ネイルしました。

・安藤アナ：（澤に）毎回やって戴いたの？

→澤：一試合毎にやって戴いた。（ネイルを）やる度に得点したので……

・安藤アナ：みんなもやってもらうんですか？（みんな、「違う」と首を振る）。

→川澄：全員にやるのでなく希望者だけに。

・安藤アナ：佐々木監督はサッカーだけでなく、男性としても素敵だと思いますか？（全員×）。  
パパ、おじいちゃんとして。男性としては見られない。

・安藤アナ：では、男性としては見ないけど、素敵ですか？ その違いは？

→丸山：男性としては歳が離れ過ぎている、でも内面がいいので格好よく見えるのだと思います。

・安藤アナ：おじいちゃんと呼ばれてショックですか？ ノリさんですか？

→佐々木：ショックではない。会見の時だけは監督と呼んでくれますが、会見以外はノリさん、ノリオ、上から目線なんですよ。

・安藤アナ：これだけ女子が集まるとまとめるのは難しいのでは？ 女子ならではの難しさは？

→佐々木：私は選手たちにまるめこまれているので。選手たち自身は、サッカーが好きな人がこれだけ集まっているので、試合が終わった時に「ガールズトーク」を行っている。

・安藤アナ：チームの和はどうやっていくんですか？

→佐々木：試合の反省をしたり、冗談を言ったり……

・安藤アナ：恋愛の経験はありますか？（ない）。

・安藤アナ：永里さんが結婚されることが決まりましたが、みなさんは続いて結婚したいと思っている人は？（みんな○と回答。「すぐにではなくいつかは」と答えていた）。

・安藤アナ：結婚して、子どもも産んでもサッカーしたい人は？（川澄だけ○）。

→川澄：今、相手がいないので。相手が出来てから考えたいと思います。

・安藤アナ：今迄いろんなことをやらないで、犠牲にしてサッカーをしてきたと思いますが、もし、サッカーをやっていないければ現在、何をしていたと思いますか？（みんな答えず、アナが海堀にマイクを向けると……）

→海堀：はっちゃけていたと思います。

そこまでタレント並みの質問が続き、一時中断する。映像は、“なでしこジャパン”の結果に対して、中田英寿、三浦知良、北島三郎、AKB 48 前田敦子、管首相のコメントが流れ、ドイツまで応援に出かけた日本の主婦2人のはじけた姿、宮間選手の父親、川澄選手の父親、丸山選手の母親の喜ぶ姿が放映される。その映像を3選手がみて「恥ずかしい」。5分間のニュース報道があり、再び、スタジオの“なでしこジャパン”に映像が変わる。6月21日に成田空港から試合に臨む選手たちを見送るのは関係者だけという映像から、9月12日に優勝して帰国した成田空港の出迎える報道陣や関係者、大衆の対比を行っている。

・安藤アナ：（映像を見ながら）取り巻く環境がガラッと変わりましたか？

→川澄：成田ではじめて実感しました。今まで、こんなに多くのカメラを向けられたことがないので……。

その後、スタジオでは電話&FAXによる視聴者からのコメント・メッセージが紹介される。仙台の主婦から“なでしこジャパン”の優勝は本当に励まされた。久しぶりに心が震え、感動し、励まされた由、あきらめない心、勇気をもらった」という内容が2件紹介された。

・安藤アナ：（それに対して鮫島に）どうですか？

→鮫島：被災地のみなさんに元気を与えようと思って戦っていましたが、反対に被災地の皆さんから多くの励ましや応援を戴き（届き）、反対に私のほうが勇気をもらいました。

彼女は、仙台に所属、丸山も東電に勤務していたため、当時は私だけサッカーをやっているのかと迷いながらプレイすることを選択した経緯がある。

・小学生女兒からの質問:みなさんはいつからサッカーをはじめたのですか。私も“なでしこジャパン”に入りたいのですが、どうしたら入団できますか。

→澤:まず所属クラブ(チーム)に入り、毎日練習して選ばなければならない。私は6歳から……。男の子のチームのなかで、女の子ひとりでやっていた。

・安藤アナ:PK戦の時、監督やみんなが笑っていたんですけど、ギャグは用意していたんですか?

→佐々木:ギャグの準備はできない。流れのなかで言いますが……。笑顔だったのは、13分前に澤のシュートが入り「こりゃもうけたな」。PKに持ち込んだ。この時点で澤が「PKは10番目にして」と言い、みんなに「澤はさっき入れたので許してやれ」などと会話していたんで。イングランド戦では「宝くじは買わないと当たらない。シュートは蹴らなきゃ入らない。」ぐらいは言いましたが……

## 2. 考察

上記の質問内容をまとめると、

- ①プレー中の具体的身体動作の解明と各場面における当事者の気持ち(映像参照)
- ②メンタル面の克服法について。
- ③フィジカル面(身長、歩幅、体力、持続力)のカヴァーと作戦
- ④オフの過ごし方
- ⑤試合の感想(漠然とした問いは答えにくい)今後の試合についての抱負。
- ⑥キャプテンとしてチームをまとめる(日本的な和)難しさ、方法について。
- ⑦男性の監督が女子の集団をまとめるのは難しいという思い込み。
- ⑧「恋愛」の有無「結婚」「出産」について

の8点に集約することができる。

①と②はスタジオにおけるメディアならではの質問であろう。テレビ中継は「今=現在」の瞬間で詳細なテクニックやその時の心境、ボールを当てる足の位置など、実況中継では説明不能な部分である。サッカーを知らない視聴者にもボールを使って具体的に足の部分を示したのはスタジオならではの、番組スタッフ一同の意図が感じられた場面であった。

③は、各自、対戦相手のフィジカル面での差をどのようにゲーム中に工夫していたのかという設問に対し、選手たちと応答しながら次の設問に引き継いでいく難しさがある。

④以降の設問については、男子チームには問われない内容である。チームをまとめるのに「和」という言葉を用いるのは非常に日本的である。個性の強い、根性のある、しかし、何より「サッカーが好き」「そのために」というマインドを共有している一点に集約されよう。

⑦も同様であるが、概して監督と選手は師弟関係としてしまうことが多く、女子選手は従うほうが楽で、独占欲が強いといわれている。したがって、男性の監督は女子選手を扱い難いという神話が生まれているのであろう。マラソンの有森は監督の出されたトレーニングメニューについて納得がいくよう説明を求め、自分にフィードバックして記録で返そうとしていたと語っている。当然、オフィシャルとプライベートは別に分けていた。記録が伸びる人は自立していることが大切で、選手が監督の価値観に合わせてしまってはならず、選手と監督が甘えと依存の関係では個の自立ができないという<sup>(14)</sup>。

⑧の「恋愛の有無」、「結婚」、「出産」への設問に関しては、女性は結婚するのが当たり前であり、出産後のスポーツ継続は難しいという社会通念がある。しかし、選手自身がこの問題に目を向けないのはなぜなのか。澤と同年齢で既婚・出産した日本代表の宮本ともみ(旧姓三井)は「伊賀FC くのいち」に所属し、2006年のアジア競技大会に出場している。そして、2006年11月に日本サッカー協会は彼女のためにベビーシッター用意を公表し、壮行試合の直前合宿には男児とベビーシッターを帯同しているのである。

そのことが、なぜ、メディアの俎上にのぼらなかったのか。また、選手たち自身がそのような先輩が存在することを話題にしなかったのは、選手自身が「結婚=引退」と考えていることによるのだろうか。1999年のW杯ではアメリカの代表選手は、20人中7人が既婚、2003年の大会では20人中15人が既婚者だったそうである<sup>(15)</sup>。

1985年にジャーナリストの山崎恵司がこの時期、「女性のスポーツプレイヤーに乗り越えなければならないハードルがある<sup>(16)</sup>」として、スポーツ各紙の一面を絵ナメにしたのがマラソンの佐々木七恵選手、現役最後のレースを優勝し、結婚のため引退に花を添えたというストーリーをとりあげ、日本人には受けたようだとする。どうして結婚したら競技生活をやめなければならないのだ。低年齢化する水泳や体操などと異なり、陸上長距離種目等はピークが遅く、登り坂にある女性がなぜスポーツを投げ出さなければならないのか？ 選手自身はこのようなことを問題とっていないことが問題で、そのような生き方に目を向けない限り、スポーツ紙の一面を女性が独占しても喜べない。(傍点は筆者)

そして、ジョイス・スミス(英国)、ガブリエル・アンデルセン(スイス)は既婚者、キャリーメイ(アイルランド)は結婚後も競技はやめず、女子マラソンの前記録保持者グレーテ・ワイツ(ノルウェー)を挙げている。木村の調査(元オリンピック男女23名対象)によると両性の選手が性別役割意識によって競技と結婚を二者択一に捉えていることが明らかになったとし、同一世代でも個人差がみられること、コーチが選手の人生の選択や、性別役割意識の構築にも影響を与えているという結果を報告している<sup>(17)</sup>。

26年前にジャーナリストが提言した問題は、社会が変容しているにもかかわらず、スポーツを通して人生を二者択一にしか選択できない価値観が構築されるとするならば、スポーツの文化程度が

高いとはいえない。インタビューにおいて、“なでしこ”たちは、

- ①ベビーシッターまで用意するサッカー協会の変化に選手自身はどのように考えているのだろうか。
- ②今回のインタビューで中学生年代のサッカー少女の育成や練習・プレー環境の整備を望みながら、その想いはスポーツメディアを介して伝えられる機会になったのであろうか。
- ③選手の立場でしか送れないメッセージをメディアに要望することはできなかったのだろうか。
- ④社会における女性の置かれた地位はこれからの若者への生き方のモデルとなることを、送り手であるメディア関係者はどのように考えていたのだろうか。

メディアでもサッカーの競技中継中や短時間でのインタビューでは送り手の意図は伝わりにくい。まして、ネット、ブログは無縁であり、サッカー専門誌など目に触れない視聴者層の視聴率が高いことを考慮しておくべきであろう。

同時期、アメリカのサッカー選手アビー・ワンバック選手とホープ・ソロ（GK）選手（宮間あや選手はアメリカでソロ選手と同じクラブに所属）の姿がCBCテレビ番組に登場していた。（BS放映）数分であったが、その話題はサッカーの試合に関するもので、前回のW杯と異なる点やブラジル戦、“なでしこ”戦に関する話であった。また、宮間が負けたアメリカのソロ選手の気持ちを思いやり、喜びを控えた行為を称賛した。反対にソロ選手は「もっと喜んで！ 素晴らしかった」との祝辞を述べている。

そして、スタジオを出た所で、ゆっくり走ってきたタクシー（ドアが開いていたので演出していたと思われる）の座席にサッカーボールを笑顔でシュートして終了。

メディアスポーツの粋な演出であった。W杯予選でグラウンドにおける“なでしこ”の選手たちのフェアプレーに対して「フェアプレイ賞」を受賞したことはどのメディアも伝えていなかった。

宮間は大会後のインタビューのなかで「今のようなフィーバーはまずいかな、と思います。自分たちが浮足立っているとかではなく、メディアの取り上げ方によってはすぐ終わってしまう、男子サッカーのように根強い人気を獲得するためにも、オリンピックが一番重要だと。ピッチで結果を出すしか新しい場所に行ける方法はない、プロ野球と同じくらい、毎回試合がTVで放映され、新聞に記載されるようになる」ことを語っている<sup>(18)</sup>。web you tube でも「もういいよ。どの番組も彼氏はいるか、結婚は、出産は、オヤジギャグ、くだらない質問ばかりで。選手たちももうバラエティ番組なんか出なくていいよ。

出演したほうがお金は儲かるだろうが……。変な衣装を着せられたり、歌わされたりゲームしたりしなくていいよ。素顔でサッカーやっている姿が一番輝いて美しいんだから……」と意見を寄せている。

その後も選手たちの各局番組への登場（録画ではあろうが）は続いているが、タレント化（タレント扱い）はエスカレートしているように感じられる。スポンサーもスポーツに関連した商品では

なく、丸山の振袖姿でのお茶漬けCF、同じく丸山のぶりっ子のロリータファッションへの変身姿や澤・川澄・海堀のインスタントラーメン（サッカーユニフォーム）のCFなど。視聴者はあらゆるメディアからその姿をイメージしていくことになる。CFを含めてフジテレビ出演時のCM回数は大きく分けて5回、1回目は9社、2回目は8社、3回目は7社、4回目は8社、5回目は8社であったが、とくにスポーツ関連の商品ではなかった。日本サッカー協会の公式スポンサーは男女・年代のカテゴリーではなくキリン、アディダス、アウディなどの大企業による包括契約となっている。したがって、“なでしこ”をめぐるCF競争はスタートしているのかも知れない。スポンサーに自分の立場や意見は述べられるものなのか？ CFは繰り返しそのイメージを植え付ける効果があるため、アスリートの一挙一動、コメントなどがスポーツ文化に与える影響は大だと言わねばならない。

#### 4. まとめにかえて：メディアスポーツの課題

以上の考察から導かれるメディアスポーツの課題として、以下の諸点を挙げておきたい。

- ①メディアからの設問の多くは「恋愛」「結婚」「出産」に終始し、伝統的性役割に縛られた女性アスリートが少なくないことが示唆された。送り手のスポーツに対する女性観（男性観）が窺われると同時に、選手たちは先輩の宮本選手のような人生の選択に対して、どのような意見や考えをもっているのかがみえない。
- ②サッカー協会の体制や男女によって賞金差が異なることや、既婚者のためにベビーシッター帯同制度をスタートしていることなど、事前に調査し、資料を用意すべきであった。そのことによって、従来の質問は女性の生き方を考える機会になったと思われる。とくにベテランの安藤アナウンサーは、選手たちの語りから人柄や人間性を引き出せたのではないか。
- ③メディアスポーツの在り方によって、「あきらめない勇気」を与える機会になる。
- ④クイズ形式やお笑い番組のような内容でなく、局独自の方法を企画してもいいのではないか。
- ⑤送り手から「視聴者の質」を変えていくことも視野に入れ、視聴率にこだわるのではなく、メディア（テレビ）にしかできないことを検討する。そのことが結果として局のオリジナルとなる。

2003年、女子柔道の田村亮子が柔道着姿とは対照的な薄物に身を包み、つけまつげに化粧をほどこし、ショートやロングに髪型を変えポーズも「女らしさ」を精一杯演じている彼女の姿が「スクープ撮り下ろし・田村亮子初セクシー」と題して11頁にわたり掲載された<sup>(19)</sup>。今回も「VOGUE ジャパン 12月号」No. 148誌に澤穂希選手のお臍を露出した写真が掲載されている<sup>(20)</sup>。田村と異なるのはファッション誌のため、いずれの頁もモデル着用の衣装をはじめ付属品に価格表示がされていること、糸井重里氏との対談に構成してある。インタビューは女子のスポーツが個人でなくチームプ

レーであったこと、そのような時代が到来したのかという驚き、スポーツのプレーが苦しいものだけでなく楽しむとはどんなことかという点を引き出している。

トップアスリートが五輪で知名度を上げて、その後はTVでお笑いタレントと同様に扱われるならば、スポーツが文化として定着していないということの証でもあり、今後のわれわれのスポーツの関わり方が課題となろう。

#### 注

- ① 日本における女子サッカーは、1960年代・神戸から始まったとされたが、2011年3月に1924年（大正14年）香川県丸亀高等女学校の生徒たちが楽しそうにサッカーをしている写真（掲載）が発見された。第一次世界大戦で捕虜として日本に連れてこられたドイツ人から伝えられたと考えられている。写真は丸亀市資料館所蔵（新婦人新聞2012年1月12日掲載）
- ② 宮本ともみ選手（2007年日本代表に復帰）  
文中の既婚・出産に対し、日本サッカー協会の支援で息子を合宿、遠征に同行した。また、協会は日本代表の国内合宿でベビーシッターを雇い、海外遠征に同行した母親の公費や滞在費の支援をした初めてのケースである。

#### 文献

- (1) 近藤米吉編『続植物と神話』雪華社1974 p.137
- (2) 澤穂希『ほまれ』河出書房新社. 2008
- (3) BSNHK 18:10～「World net work」2011/10/8 彌津博人レポート
- (4) BSNHK「アメリカ女子サッカー事情」「EL MUND」2011/9/14
- (5) 多木浩二『スポーツを考える』ちくま新書1995
- (6) 飯田貴子「スポーツ・メディアの現状—テレビスポーツのジェンダー分析」『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店2004 p.81
- (7) 平井肇「アメリカ人にとってのオリンピックと日本人にとってのオリンピック」『スポーツ批評4』季刊 窓社1987 p.100
- (8) 谷口源太郎「3スポーツとジャーナリズム」『スポーツ/メディア/ジェンダー』山本理人・鈴木守編著 道和書院2001 p.45
- (9) 岡田光弘「第8章スポーツ実況中継の会話分析」『現代メディアスポーツ論』世界思想社2002 pp.163-195
- (10) 三宅和子「スポーツ実況放送の談話スタイル—実況におけるアナウンサーと解説者の役割—」東洋大学短期大学紀要29 1997, pp.11-20
- (11) 松井貴之「送り手が意識するスポーツ中継の視聴像—限界芸術論から—」第10回マルチメディア研究部企画・メディアスポーツを考える, シンポジウム2010
- (12) 山本浩「ワールドカップ実況放送の現場から」『マス・コミュニケーション研究』No.62 2003 pp.58-81
- (13) 黒田勇「メディア・スポーツの変容—「平和の祭典」からポストモダンの「メディアイベント」へ—」『マス・コミュニケーション研究』No.62 2003 pp.5-22
- (14) 有森裕子×清水論×友添秀則対談「3アスリートのミッションとはなにか」『スポーツのいまを考える』創文企画, 2008 p.146
- (15) 河合薫「なでしこ報道で露呈した“ニッポン”の未熟な女性観」日経ビジネス オンライン, 2011, 7. 28号
- (16) 山崎恵司「女子選手と結婚」WSF Japan News Spring Vol.6 1985, 『日本女性とスポーツ—明治・

- 大正・昭和から平成へ—WSF ジャパン 20周年記念誌』2002, p. 31
- (17) 木村香織「女性トップ・アスリートの競技継続のための社会的条件に関する研究—1960～1990年代に活躍した選手の結婚・出産・育児というライフイベントに着目して—」『スポーツとジェンダー研究8』2010, 9月 p. 59
- (18) 日々野真理『凜として』KKベストセラーズ, 2011, p. 102
- (19) 梅津迪子「女性スポーツの商品化」『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店 2004 p. 113
- (20) 「VOGUE」December 2011. No. 148 pp. 84-87